

原著論文

J. D. サリンジャー 『ライ麦畑でつかまえて』 に関する一考察

菊池 せつ子

A Study of *Catcher in the Rye* by J. D. Salinger

Setsuko KIKUCHI

Abstract

Jerome David Salinger released his novel *The Catcher in the Rye* (1951), an immediate popular success. But the success led to public attention and scrutiny and Salinger moved to the West from New York and withdrew from a public view spending a reclusive life all his life. The theme of this work will be studied, focusing “adolescent alienation”, “loss of innocence” and his salvation in the protagonist Holden Caulfield. His depiction was influential, especially among adolescent readers, selling around 250,000 copies a year with total worldwide sales over 65 million.

This novel's plot is simple, detailing sixteen-year-old Holden's three-day experiences in New York City following his expulsion, and departure from an elite school. He serves as an insightful but unreliable narrator who expounds on the importance of loyalty, the “phonies” of adulthood and his own duplicity which lead to “his dilemma” between adulthood and adolescences. Recurring themes in this novel connect to the idea of innocence and adolescence, including adulthood, disconnect of communication between teenagers and “phony” adults, and the perceptive, precocious intelligence of children.

Holden's dream is becoming a catcher in the rye and helping children go over the cliff. But he knows his dream doesn't come true, as his dearest sister, Phoebe points out. In the end, Holden who has adolescent anxiety recognizes to be relieved by her pure and innocent mind which Salinger sought in his life.

Key Words : Adults' Phonies, Disconnect of Communication, the Dreamy Rye and Salvation

キー・ワード : 大人のいんちきさ、コミュニケーションの断絶、夢のライ麦畑と救済

## はじめに

ジェローム・デイヴィッド・サリンジャー (Jerome David Salinger) と言えば、長編小説『ライ麦畑でつかまえて』(The Catcher in the Rye, 1951) で世界の若者の熱烈な共感を集めた後、突如、米北東部の片田舎で半世紀以上の隠遁生活入り、徹底したプライバシー重視の生活を送っていたため、ほとんど世間と接触がなかったが、近所など周りの人とのトラブルで訴訟を次々に起こすなどで注目を集め続けた作家であった。<sup>(1)</sup> 短編30編と長編1編を書いた彼の唯一の長編である『ライ麦畑でつかまえて』が出たのは1951年、朝鮮戦争の最中であり、サリンジャーが最初に持ち込んだ出版社からは、主人公の行動が「クレイジー」だと評されてつき返されたこの小説が、ボストンのリトル・ブラウン (Little Brown) 社の手で出版されたとたんに評判になる。この作品への評価と受容の運命は極めて波乱に富んだが、世論の毀誉褒貶の中で見る見るうちに売れ行きを伸ばし、たちまちにして出版社の予測をはるかに上回る出版部数を記録する。

上記の紆余曲折の出版後、『ライ麦畑でつかまえて』は、『ハーバース・マガジン』(Harpers Magazine) などの多くの書評がその独創性を高く評価し、ベストセラーのフィクションの部門で7ヶ月間4位を続けるほどの売れ行きを示した。その後もこの作品の人気は衰えを知らず、2007年までに世界全体で6000万部という驚異的な売り上げを達成しているという。作者は、それまでに発表した30編の短編小説の中から9編を選んで一本にまとめた『ナイン・ストーリーズ』(Nine Stories, 1953) を上梓し、さらに洗練された格調のある雑誌作りで、彼のあこがれであった週刊誌『ニューヨーカー』(The New Yorker) に短編小説「フラニー」("Franny," 1955) など、立て続けに短編を発表するチャンスを得た。

日本においても1964年に刊行された野崎孝の邦訳(累計部数は250万部)により、広く読まれるようになり日本文学にも多大な影響を与えたと言われている。もはや近代古典の仲間入りを果た

したと見てもよいと思われるこの作品は、さまざまな国で翻訳出版されて著しい反響を呼んでいるが、それはこの作品が、国境を越えて、現代の文明世界の広範囲な地域に亘る、様々な人たちに訴える魅力を備えている証拠であると思われる。20世紀の「偽善」と「虚飾」に満ちた大人の世界に反発する、少年を描いたこの小説は実に多彩な主題を含み、さらにアメリカ文学の真正の伝統を受け継ぎ、第二次世界大戦後の文学、特に1950年代の文学を代表する作品の一つであると称され、人種・社会制度・歴史の相違を超えて、現代の人々特に様々な国の若者の共感を呼び続けているが、本稿では作者サリンジャーが、若き主人公の心の葛藤を通して、『ライ麦畑でつかまえて』で追い求めたテーマ、とくに多感な少年期の「精神の彷徨」と「その救済」について考察したい。

## 孤高の隠遁者

サリンジャーは1919年ニューヨーク市に、裕福な食品物輸入商であったユダヤ系の父ソロモンとアイルランド系のカトリック教徒の母マリー(後にユダヤ教に改宗しミリアムと改名)の間に生まれた。ニューヨークの有名高校に入学するが、成績不良で退学となる。その後、彼はペンシルベニアの軍事教練を主とする高校を出た後、コロンビア大学などの三つの大学を転々としたが、いずれも卒業していない。17歳から18歳にかけて、仕事見習としてヨーロッパで暮らしたり、第二次大戦中はノルマンディー上陸作戦に参加したりと異色の経歴の持ち主であった。<sup>(2)</sup>

彼は、ニューヨークという大都会の喧騒と雑踏の中で人目にさらされることなく、その人間形成期を過ごしたが、『ライ麦畑でつかまえて』の出版を契機に、始めはいやいやながらサービスしていたサリンジャーであったが、押し寄せるマスコミに嫌気がさして、すっかり人間嫌いとなってしまった。拍車のかかったマスコミ嫌い<sup>(3)</sup>、突如として襲い始めた世の中の好奇の目の執拗さに耐えかねて、1953年、その住まいを遙か北方のニュー・ハンプシャー州にある、西部の小さな町コーニッシュに移した。それからは、住居の周囲

に高い柵を廻らして人目を避け、隠遁者にも似た生活を送っているという風評が伝わってくるのがせいぜいで、作者そのものが世人の眼前からはほぼ完全に姿を消してしまい、それ以上のことは消息が知れない状態となった。

もともと正体を人前にさらすことを極端に嫌うサリンジャーではあったけれども、これほど徹底して、これほど長くその消息すら世間の耳目から隠され続けているならば、移り気な世間の関心はいつしか薄れ、根強い共感者を持つサリンジャーでさえもはや忘れ去られるのではないかと、懸念されたのであるが、この長編小説は今なお出版当初と同じ売れ行きを続けていることが伝えられている。50年と言えば一世代だが、この作品は世代から世代へと読み継がれながら、読者各自の胸に生き続けてゆくだけの生命力を持っているようである。

しかし、サリンジャー自身はこうした人気をよそに、妻クレアと二人の子供（マーガレットとマシュー）と共に片田舎にひっそりと暮らす隠遁生活は変わることがなかった（妻とは後に離婚）。彼は近所の人ともめつたに口を聞かず、手紙には一切返事を出さず、彼の捻くれたような生活態度が、仕事の必要上の付き合いのわずらわしさを避けているのか、あるいは「サリンジャー神話」<sup>(3)</sup>を意識しての演技によるものか、いずれにしても彼ほど姿を見せぬ作家は珍しいと言われて久しかったが、今年（2010年）の1月27日に91歳で死去したという新聞記事によって、久しぶりに衆目の関心を集めた。

世間と没交渉の暮らしぶりといい、自己の経歴を語らぬことといい、サリンジャーがこれほどプライベートに気を使うのは、大衆社会においては自分を自分たらしめる一つの手段ではあるようにも思われる反面、彼のこの性癖・性格・生活習慣が、周囲との間に断絶を生むことは必然である。このコミュニケーションの断絶から生まれる「孤立感」はそのまま彼のこの作品に反映されている。

## ホールデンの苦悩と孤独

本作品『ライ麦畑でつかまえて』は、第二次

世界大戦後まもないクリスマス前の週末から月曜にかけての三日間、四番目の高等学校も不勉強のため退学（今回が四度目）させられた16歳の少年ホールデン・コールフィールド（Holden Caulfield）が、行く当てもなくニューヨークの街を彷徨った、悪夢のような追憶の記録であり、極めて私的で個人的な経験がその内容である。ホールデンのクリスマス・シーズンにおける三日三晩に渡る行状を、およそ半年後と考えられる彼が17歳の時、一人称の軽快な独白体で語る小説であり、ピエロ風のおどけた身振りの下に隠しきれない、一種独特の重苦しい「孤独感」が至る所に漂う作品となっている。

全体が26章に分かれており、第1章から第10章までが第一日目、第19章までが第二日目、第26章までの残りの7章が第三日目の出来事を扱い、物語は主人公ホールデンが兄（D.B.）のいるカリフォルニアの精神分析医のもとで、思い出を辿る構想になっており、折に触れ、昔のことがフラッシュバックの手法で回想されている。この作品は長編と言っても、エピソードの連続であり、本質的には短編の集まりと言えなくもない構成となっている。彼の行動や言葉は、すべて周りの世間の大人たちからはまるで理解されず、ホールデンの「苦悩」と「孤独」は章が進むにつれて深まっていく。しかし、主人公のホールデンは、不良じみているが根は純粋な、「善良な不良少年」として描かれ、彼は大人の世界に入りきれず、さりとて子供の無邪気な世界にも留まっていられない孤独をもてあましている。大人と子供の間違った立場の多感な思春期特有の「苦悩」を抱えているホールデンは、大人と子供の間での存在であるというジレンマに悩む少年として描かれている。

どっちつかずの彼ではあるが、大人の心事を見て取るだけの精神的成長を既に遂げている面も併せて持っている。ホールデンが忌み嫌う、ペンシー高校（Pency Prep）のサーマー校長（Mr. Thurmer）でも、卒業後社会的に大成功をし、母校に多額の寄付をする成金の葬儀屋のオッセンバーガー（Ossenburger）でも、すべて彼らの心の動きは彼によって正確に見抜かれている。ホールデンは研ぎ澄まされた純な感性を通して、世の

中の不純なものを鋭く切り捨てていくが、これは諸刃の剣となって自分をも傷つける。

英語以外は全科目不合格となり、学業不振で退学を言い渡された多感で純粋な心の持ち主である少年ホールデンは、クリスマス休暇を前にして、一般の学生より早くニューヨーク市内にある自宅に向け出発したが、これは四度目の退学とあって両親に合わせる顔がないため、すぐに家に帰る気になれず、ダウン・タウンの二流ホテルのエドモントに泊まることにする。セントラル・パークを通るとき、今の惨めな自分の姿を投影しているように思えた池のアヒルについて、タクシーの運転手にアヒルは厳冬の期間どうしているのだろうかと唐突な質問して、頭が変な青年と思われたりもする。

さらに宿泊する予定のホテルの彼の部屋から眺めることのできるのは他のホテルの窓だけであったため、やりきれない気分の彼は、気を紛らそうとして外出し、三人のシアトルから来た年上の田舎娘を相手におしゃべりしたり、彼女たちを相手にダンスに興じたりするが、世慣れてない無垢な彼は、結局、彼女達の分まで全部飲食代を払わされてしまうなど、散々な目に遭ってしまい彼のやりきれない気持ちはさらに深刻さを増していく。寂しさが募るばかりの彼は、元ガールフレンドのサリー・ヘイズ (Sally Hayes) を電話で呼び出し、一緒に喜劇を見たりするが、彼の心は一向に満たされず、それどころか彼女と喧嘩別れをしてしまう。

さらに第 14 章ではホールデンは、エレベーターボーイでポン引きのモーリス (Maurice) に、未成年である事を見透かされ、交渉額以上の金額を請求され、その支払いを拒否したため、彼から手酷いボディブローを浴びることになる。その苦痛とやるせない気持ちのバランスを取るため、精一杯映画の手負いのヒーローを演じ、惨めな気分を紛らわせようとする。他者を演じることができれば、その間は惨めな自己を意識しないで済むからである。しかし演技の内容は、あくまで「傷ついた自我」であり、自らの実像に他ならず、他者に化身しても、自らの惨状を演じずにはいられない哀れなピエロのホールデンであった。

ホールデンは、自宅へ戻れずに、孤独を紛らわすために出かけたバーを出た後 (19 章) いよいよ電話衝動が抑制できなくなり、昼間、喜劇を見た後、気まずく別れたサリー・ヘイズに再び夜中に電話をしてしまう。彼は呂律が回らないほど酔っていたが、ようやくサリーが電話口に出て「ええ。あなたは酔っ払ってるのね。もういいから寝なさい。いったい今どこにいるの？誰と一緒になの？」*"Yes. You're drunk. Go to bed now. Where are you? Who's with you?"*<sup>(5)</sup>と問うと、彼は次のように返事をする。

*"Nobody. Me, myself and I." Boy was I drunk! I was even still holding onto my guts. "They got me. Rocky's mob got me. You know that? Sally, you know that?"*<sup>(6)</sup>

「誰もいませんよ。正真正銘、たった僕ひとりしかないんだ」、やれやれひどい酔っ払い方じゃないか！（省略）まだしっかり腹を押さえているんだから。「やられたよ。俺はロッキーの手下に、一発くらっちゃった。そのことはわかってるのかな、サリーちゃん、君にはわかってるのかい？」（村上春樹訳、これ以降特記なき限りは村上訳）

バーで酔っ払ってトラブルを起こし、殴られ傷ついたホールデンは、今置かれている彼の凄絶な孤独を、ガールフレンドのサリーに必死に伝えようとする。しかし電話の向こうのサリーに向かってまで、演技を続けて、自分のことをわかって欲しいといくら訴えても、サリーには理解できない。酔っ払いの相手はごめん被るとばかりに、サリーは、「おやすみ。うちに帰って寝なさい」*"Yes, Good Night. Go home and got to bed."*<sup>(7)</sup>とありきたりの言葉を吐き、さっさと電話を切ってしまう。これはサリーがいかに繊細で傷つきやすいホールデンのことを理解していないかを示しており、この無理解と無責任な気休めがまたホールデンを傷つけるのである。そして最後に、彼は彼なりに酔っ払うと自分の感情をコントロールできなくなってしまうことを反省し *"When I'm drunk, I'm madman."*<sup>(8)</sup>、サリーに電話したことを後悔

する。

その後もホールデンは、自分でも認めるように、狂ったような振舞いを続ける。サリーに電話しても、バーのピアニストに絡んで殴られても、あるいは寒天下、自虐的に水をかぶってみても、ホールデンの今の孤独感を紛らわすことはできないのである。しかし精一杯背伸びして、寂しさに打ちひしがれて、感極まって泣き出すところは“*I was crying and all. I was feeling so damn depressed and lonesome.*”<sup>(9)</sup>、ホールデンもまだいたいけな少年の域を抜け出してはいないことを示している。

凍てつく深夜、洗面台に水を張り、しっかりと耳のところまで頭を浸け、顔を拭きさえしなかったため、上半身ずぶぬれになりながら、昼間セントラル・パークにいたアヒルの行方を狂ったように探すホールデンは（第20章）、行方定めぬ自分自身の居場所を探していることに他ならない。ホールデンの放浪——それは、今のホールデンの精神的不安定の反映である。彼は自分のアイデンティティを求めて、アヒルの行方を追っている。そして彼のアイデンティティの危機は、アヒルの不在によって象徴されているかのようである。

ホールデンが精神的に「落ち込む」(depress) 感覚は、具体的に、体が「落ちる」(fall) 感覚となつて、セントラル・パークの池に落ちるイメージや墓地の穴の中に埋まるイメージのような、自らの死のイメージに発展する。これは彼の孤独がまさに究極に行きついた姿であろう。話し合うことも、理解されることも絶えてなく、死者のみに囲まれるイメージだけが彼の脳裏をよぎるのである。

人間とのコミュニケーションに絶望したホールデンは、極限の孤独感を持って余し、肺炎で亡くなった弟アリー (Ally、当時10歳) の思い出にすがるのが満たされず、ホールデンの思いは、唯一の彼の理解者である妹フィービー (Phoebe) へと向かう。もし自分も肺炎で死ぬば、自分がアリーの死を身もだえして嘆いたように、フィービーも自分のために嘆き悲しんでくれることを空想し、自分が死ぬとき、妹のフィービーだけが自分の死の意味を理解してくれると思ひ込む。葬式にいくら多くの人が集まっても、その中にどれだ

け真に死者を知り、真に心からの追悼をする人がいるだろうか。これまで出会った人の中で真の相互理解が得られた例は極めて少なく、ホールデンの不信感は留まるところを知らず、彼の苦悩は深まり、「孤独」という絶望の淵を彷徨うばかりである。そして、立ち往生した彼はフィービーに会いたいと熱望し、セントラル・パークから自宅へ向かう。

帰宅してみると両親は外出していて不在で安堵したが、妹のフィービーによって父親が激怒していることがホールデンに伝えられる。どうしても両親に会いたくない彼は、フィービーからお金を借りて、家を飛び出し彼が全幅の信頼を置いている、前の高校の英語の教師アントリーニ (Mr. Antolini) を訪ねる (第24章)。アントリーニはホールデンが自暴自棄にならぬようにと彼をやさしく諫めるが、彼が夜半、先生の家ソファでうつらうつらしていた時、アントリーニが彼の頭をなで、同性愛らしきことを始めそうな気配に驚いて眼を覚まし、アントリーニのアパートからも飛び出してしまふ。ホールデンが困り果てたときに頼りにし、はじめは、「このミスタ・アントリーニは、僕がこれまで教わった教師の中では、おそらく一番まっとうな人だった。まだ若く、兄のD.V.より少し年上というくらい。だから敬意を抱きつつも、適当にふざけた口を聞くことだってできるわけだ。さっき僕が話をしたジェームズ・キャッスルという窓から飛び降りた子を、みんなが遠巻きにする中、ひとり進み出て抱き上げてくれたのがこの人だった」“*He was about the best teacher I ever had, Mr. Antolini. He was a pretty young guy, not much older than my brother D.B., and you could kid around with him without losing your respect for him. He was the one that finally picked up that boy that jumped out the window I told you about, Old James Castle.*”<sup>(10)</sup>と賞賛し、全幅の信頼を置き頼みの綱とも言える教師からも裏切られたと感じ、彼の孤独はさらに深まっていく。

厳格な両親からも理解されず彼らに強い不信感を抱き、また友だちや信頼していたはずの教師によっても心を満たされないホールデンは、自分の

住む世界には、彼の思考と感情に共感する人間はいないと絶望し、彼の苦悩は深まるばかりである。しかし彼は、「孤独だ」「気が減入った」と繰り返しながらも、人との心のつながりを求めて遍歴を続ける。

## 大人のインチキに対する嫌悪感

ホールデンの不信の主な原因は、退学させられた高校生活や世の中にあった。十歳の妹フィービーが、ホールデンの退学の理由を尋ねると、それに対してホールデンは、最初にサーマー校長や教師スペンサーを槍玉に挙げ、さらにはクラスメートのストラドレーターや (Stradlater) アクリー (Ackley) といった友達の例を上げて、ペンシー高校がいかにかインチキ (phony) と欺瞞に満ちており、いかに人間関係が悪いかを強調する。

まず、少年ホールデンの苦悩の原因の一つとなっている、彼が忌み嫌う大人や世の中の「インチキさ」についての代表的な例は、彼がペンシー高校 (4校目) に来る前に通っていたエルクトンヒルズ (Elkton Hills) 高校の放校理由を、歴史の教師スペンサー (Mr. Spencer) に問われる場面に垣間見える。ホールデンは、「そりゃ、まあ、話すと色々あるんです」“Oh, well it's a long story, sir.”<sup>(11)</sup> と彼に向かっては即答を避ける。しかし、そう言った端から、彼は読者に向かい、「僕がエルクトンヒルズを出た最も大きな理由はだね、周りがインチキ野郎ばかりだったからさ」“One of the biggest reasons I left Elkton Hills was because I was surrounded by phonies.”<sup>(12)</sup> と説明し、エルクトンヒルズ校のハース校長 (Mr. Haas) が「僕が今までお目にかかった中でもとびっきりのインチキ野郎」であると、次のように、「嫌悪感」を込めながら具体的な例を挙げて長々と非難する。

For instance, they had this headmaster, Mr. Haas, that the phoniest bastard I ever met in my life. Ten times worse than old Thurmer. On Sundays, for instance, Old Haas went around

shaking hands with everybody's parents when they drove up to school. He'd be charming as hell and all. Except if some boy had little old funny-looking parents. You should've seen the way he did with my roommate's parents. I mean if a boy's mother was sort of fat or corny-looking or something, and if somebody's father was one of those guys that wear those suits with very big shoulders and corny black-and-white shoes, the old Haas would just shake hands with them and give them a phony smile and. . . I can't stand that stuff. It drives me crazy. It makes me so depressed I go crazy.<sup>(13)</sup>

例えば、ミスタ・ハースという校長がそうだ。僕は今までの人生でこれくらいインチキな野郎に出会った覚えがない。こいつはもう、ここのサーマー校長の十倍くらいはインチキなやつなんだ。例えばこのハースは日曜日になると、学校を訪問する生徒の父母とべたべた握手してまわるんだ。ものすごく愛想良くふるまうわけだよ。ただしどっかの生徒の両親がぱっとしない変てこりんな見かけをしていたりしたら、話はまったく違ってくる。やつが僕のルームメイトの両親に会ったときの光景を、君にも見せてやりたかったな。つまりさ、どっかの生徒の母親がデブだったり、田舎じみた見かけだったりしたら、あるいは父親が肩のすごく大きな野暮ったい背広を着ていたり、鈍くさい白黒コンビの靴を履いていたりしたら、このハースのやつはちよろちよろとおぎなりの握手をして、とってつけたようなにっこり笑いを浮かべるだけで、あつというまに次の誰かの両親に移ってしまう。(省略)僕はその手のことに我慢できなかったんだよ。そんなのを見ていたら、頭がどうになっちゃう。とことん落ち込んで、神経がおかしくなるんだ。

学校の長たる校長の価値判断が、生徒の両親や服装や、服装が示す社会的地位といったものによって決定され、しかも、心の中で軽蔑を感じていても、笑顔で振舞えば、気さくなよい人間で通

ると考えており、校長がこのような表面的な要素に影響され、表面だけを取り繕っている姿が、ホールデンが繰り返し使う「インチキ」という言葉と結びつき、学校の本質が偽善に満ちていることを強調して、彼の学校に対する「嫌悪感」を深めさせ、純真で繊細なホールデンは「頭がどうかなる、とことん落ち込む、神経がおかしくなる」(It drives me crazy, so depressed. I go crazy.) といった彼特有の言い回しで世の中の「インチキ」を非難する。このフレーズは全編を通して、ホールデンが折りに触れ発する言葉で、多感な少年ホールデンの心情を象徴するキー・フレーズとなっている。

さらに、ホールデンが「インチキ」とよぶ偽善や、弱肉強食の生存競争、物質主義的価値観などの高校の本質が浮き彫りにされる。同様に、校長だけでなく高校の教師についても無神経さや欺瞞などの欠点が強調され、少年たちを導く立場にいるはずの教師の無能さや無神経さに、「少年の心」を捨てきれないホールデンの心はずたずたにされるのである。このことは、ホールデンが放校になる前にわざわざ挨拶に行ったとき、あからさまな非難を込めて眺める教師の例が顕著である。

例えば、「幸運を祈る」と歴史の教師スペンサー(Mr. Spencer)に言われて、反射的に「嫌悪」を感じ、自分ならばそんなことは絶対に言わないだろうと思うホールデンの感覚は、理解・共感することができる読者も多いであろう。しかし、社会生活に支障をきたすと懸念する大人もいるのではないだろうか、筆者もその一人であるが。

After I shut the door and started back to the living room, he yelled something at me, but I couldn't exactly hear him. I'm pretty sure he yelled "Good luck!" at me. I hope not. I hope to hell not. I'd never yell "Good luck!" at anybody. It sounds terrible, when you think about it.<sup>(14)</sup>

ドアを閉め、居間の方に戻りかけたところで、先生が僕に向かって大声で何か怒鳴った。はっきりとは聞き取れなかったけど、たぶん間違いない。「グッド・ラック！」と叫んだんだと思う。そうじゃなければいいんだけどと思う。真剣に

そう願うよ。相手が誰であれ、「グッド・ラック！」なんて僕は叫んだりしない。だってさ、そんなこと言われたら気が滅入っちゃうじゃないか。

彼の心情は次のようである——祈りもしないのに祈ると言い、祈る対象すら持たぬ人間が祈ると書く——その無神経さ、その「インチキさ」、さらには、「幸運とは何か」、相手の「幸運を祈る」とは具体的にどういうことか、それを考えもしないで安易に口にする無責任さ。これらがもし、相手を罵倒するなり、揶揄するなり、相手にマイナスを与えるような、したがって自分もそのために不利になるような場合なら、あるいは許容されるかもしれない。しかし、相手にプラスを与える性質の言葉を、自分の真意以上の効果をはらませて口にするのはいやらしいという感覚こそが、ホールデンの「嫌悪感」の基本となっている。

しかし、「幸運を祈る」と言われることに嫌悪を感じたホールデンが、生きていくためには「お目にかかれてうれしい」と、嬉しくもなんともない時でも言わなくてはならないのだと諦めている姿は、彼が大人の世界に片足突っ込んだ不安定な姿勢で立っているとも言えるし、彼という一個の人間の中に、子供の夢と大人の現実とが混在しているからであるとも言える。つまり、この繊細な感覚に基づいた彼の反発と「嫌悪感」が、この物語の「永遠の少年ホールデン」の真骨頂であり、晴れない霧のように、作者サリンジャーのメッセージとして全編を覆っているのである。

妹フィービーに具体的な将来の目標として、父親のような弁護士はどうなのかと聞かれて、「インチキ」を忌み嫌うホールデンは次のように答える。

"Lawyers are all right, I guess—but it couldn't appeal to me," I said. "I mean they're all right if they go around saving innocent guys' lives all the time, and like that, but you don't do that kind of stuff if you're a lawyer. All you do is make a lot of dough and play golf and play bridge and buy cars and drink Martinis and look like hot-shot. And besides. Even if you did go around

saving guys' lives and all, how would you know if you did it because you really wanted to save guys' lives, or because you did it because what you really wanted to do was be a terrific lawyer, . . . How would you know you weren't being a phony? Trouble is, you wouldn't." (15)

「弁護士も悪くはないと思う。でもさ、あんまりぴんとこないんだ」と僕は言った。「弁護士がいつもいつも無実の人間の生命を救ってまわって、しかもやりたくて、そういうことをやってるっていうのなら、それも悪くないんだよ。でもさ、現実には弁護士になつたらさ、そんなことをしてる暇なんてないんだ。しこたまお金を稼いで、ゴルフをして、ブリッジをして、車を買って、マティーニを飲んで、大物づらをするので手一杯なんだ。それだけじゃないよ。もしかたえ無実の人間の生命をじっさいに救ってまわっているとしてみさ、それがほんとにその人の命を救いたいからやっていることなのか、それともすげえ弁護士だとみんなに思われたくてやっていることなのか、自分でもだんだんわからなくなっちゃうんじゃないかな。(省略)自分がインチキ人間かどうかなんて、自分じゃなかなかわからないものなんだ。困ったことには、そいつはとことんわかりにくいんだよ」

会社の顧問弁護士であり裕福な暮らしをしている父親に対する、ピュアな心の持ち主であるホールデンの批判は、弁護士が正義の擁護者の顔をして利権の擁護者となり、それによって資財を蓄える「フォーニーな」姿勢をホールデンは「嫌悪」する。地位もない名誉もないホールデンは、多くの弁護士が社会的地位と名誉のためにおのれの職業を利用して、それが結果でなく、目的になってしまっていることを非難するのである。ホールデン少年は社会のしがらみには一切縛られず、最も敏感に嗅ぎ分けて、最も「嫌悪」と侮辱を示すのは、彼にとってのいわゆる大人社会の「インチキ」なもの、「いやらしい欺瞞」なのである。

ホールデン少年の三日間にわたる放浪は人間らしさ、または実現可能な愛の探求である。彼は周囲に充満している物欲、残酷性、不潔、無理解な

どいわゆる「インチキ」に対して、激しい「嫌悪」と反発を感じる。口では理想を唱えながら事実がそれに伴わぬ大人の世界は「インチキ」以外の何者でもない。両親の服装によって態度を変える学校の校長、祈りを説く成金葬儀屋、無理解な教師、両親など、大人の行為は「多感な年齢」のホールデン少年に不信の念を抱かせる諸悪の根源となっている。既成の価値観に縛られず、自らの価値観も確立されていない彼が「嫌悪」するのは、単なる嘘やごまかしでなく、精神の下劣さ低俗さ、根性の汚さ、そこから来る糊塗、欺瞞、追従といった性質のものである。少年ホールデンは、その不潔さを、理屈ではなく感覚的に感じ取り、反射的に反発するのである。

## ディレンマとコミュニケーションの断絶

しかし、自虐的・自爆的行為を繰り返すホールデンは行き詰り、当然のこととして深刻なアイデンティティの危機に見舞われることになる。四度の目の退学を余儀なくされ、追いつめられたホールデンは、自分を偽って妥協するか、クラスメートのジェームズ・キャッスルのように窓から飛び降りて自殺を図り、アイデンティティを守ろうとするか、どちらかの道しか残されていないように思う。ホールデンは、出来ることならジェームズ・キャッスルのように潔く、納得いかない今のような状況に別れを告げて、アイデンティティを守りたいと思っている。しかし現実には、彼には、そこまでの踏ん切りはつかない。

それだけ一層、ホールデンはジェームズ・キャッスルを美化するが、しかし結局は、彼は妥協の道を選ばざるを得なくなる。なぜなら、醜悪なニューヨークの現実を避けて、西部に逃避する道を選ぶという方法が、選択肢の一つとしてホールデンの頭の中に浮かぶが、その選択肢は、なにより彼の心の拠り所であり敬愛している妹のフィービーの手酷い涙の拒絶にあったために、断念せざるを得なくなったので。そこでホールデンは、ほろほろになりながらもインチキや欺瞞が渦巻く世の中で生きようとする。しかし教師をはじめとして世の中の大人が「成熟」や「分別」と見なすも



のは、ホールデンが社会の一員としての役目を優先し、時には自分の内面の欲求や声を抑えることを要求し、人間存在の基本と関わる純粋で汚れない高潔さと妥協することを迫り、イノセントな心を持ち、大人になりきれしていないホールデンは、要求を受け止めきれずに、さらに自虐的な行為を繰り返してしまうことになる。

一方で、ホールデンは「分別」を嫌い、「成熟」を拒否する反面、彼はそうしたものが要求する社会的な責任に背を向けることを、全面的に是認しているわけではない自分を発見する。贅沢な鞆を好んだり、可愛い女の子に惹かれたりするように彼は物質的な豊かさや外面的な美しさを手に入れたいと望みもすれば、優等生のルームメートの気を引きたがるように、彼を取り巻く社会からも好意的に受け入れられたいとも願っている。ただ、そうした物質的な豊かさや社会的な関わりを実現するために、教師（スペンサーやアントリーニ）が「分別」や「成熟」という概念によって提案するものと、美しい心や思いやりや優しさといった内面的な価値と折り合いを付けることを、彼は拒否するのである。

言い換えれば、物質的な豊かさや社会的責任と、内面的な高貴な資質とが、現実社会では互いに相矛盾することを踏まえ、二人の教師はそれらを両立させるために互いを折り合わせ、中庸を探ろうとするのに対し、純真な心を残している少年ホールデンはたとえ対立する性質のものであろうとも、どちらの性質もそれぞれに完璧な状態で実現させることを目指すのである。

しかし、この「ディレンマ」こそが主人公ホールデンの悲劇であり、この作品のテーマの一つである。この作品の中で絶えず繰り返される「ディレンマ」によってホールデンは八方ふさがりの状態となり逃げ場がなくなる。彼には出発点も逃げ出す場所も、都会という文明社会にしかないからである。彼は元ガールフレンドのサリーを誘って、あこがれの西部へ逃げ出そうとする（彼女には軽く鼻であしらわれ、フィービーにも拒絶されもちろん実現しないが）。

次のようにホールデンは心の中に、アメリカン・ドリームのごとく「自分の夢」を思い描く。

... and then I'd start hitchhiking my way out West. . . and in a few days I'd be somewhere out West where it was very pretty and sunny and where nobody'd know me and I'd get job. I figured I could get a job at a filling station somewhere, . . . I didn't care what kind of job it was, though. Just so people didn't know me and I didn't know anybody.<sup>(16)</sup>

…その後でヒッチハイクで西部に向かうんだ。(省略) すごく感じが良くて、太陽がさんと照っていて、僕の事を知っている人間なんて誰ひとりいない場所に行ってそこで仕事を見つけるんだ。ガソリン・スタンドの仕事ならできるんじゃないかと思った。(省略) その誰ひとり僕の事を知らず、僕の方も誰のことも知らない場所であるならね。

ホールデンの夢は、最早行くべき空間を失ったアメリカ人のノスタルジーを示していると言えよう。しかし、現実には彼を待ち受けるのは大人の世界（金をためてゴルフやブリッジをし、自動車を買ってマティーニを飲み、他人から偉い奴だと思われる身分になること）であり、それ以外は敗残者（日本でも昨年流行った「負け組」）への道しか残されていないのである。

ホールデンは出世欲も競争意識も持っていないし、現実社会では無目的のように見えるが、現実社会の弱肉強食、資本主義の冷酷さに対しては反発し、負け組に共感・同情する。高校では教師が人生をゲームに喩えた時、彼は次のように腹立しさを覚える。

"Life is a game, boy. Life is a game that one plays according to the rules."

"Yes, sir. I know it is. I know it." Game, my ass. Some game. If you get on the side where all the hot-shots are, then it's a game, all right—I'll admit that. But if you get on the other side, where there aren't any hot-shots, then what's a game about it? Nothing. No game.<sup>(17)</sup>

「人生とはゲームなんだよ、あーむ。人生と

は実にルールに従ってプレイせにゃならんゲームなんだ」

「はい、先生。その通りです。よくわかっています」ゲームときたね、まったくたいしたゲームだよ。もし君が強いやつばかり揃ったチームに属していたら、そりゃたしかにゲームでいだろうさ。それはわかるよ。でももし君がそうじゃない方のチームに属していたとしたら、つまり強いやつなんて一人もおりませんっていうようなチームにいたとしたら、ゲームどころじゃないだろう。お話にないならないよね。ゲームもくそもあるもんか。

彼の周囲は俗物や功利主義で満ちているけれども悪人はいない。そして彼は嫌いな学友にもネクタイをくれる親切を見出し、口笛のうるさい学友にも口笛の才能を認めてやる気持ちを持っている。彼は金を奪った男にさえ、思いやりを示すことさえしてしまう。結局、彼は今まで悪口を浴びせてきた人間の誰も彼もが恋しくなったりする。

ホールデンは周囲の人間に不信と反発を感じながら、しかも彼らに愛情を抱かねばならぬという「ディレンマ」に置かれているのである。彼は社会に対する反逆児ではなく、むしろ「愛の欠落」に悩む者と言える。しかし彼の敏感な感受性と自意識は、彼をますます「ディレンマ」に追い込むことになり、周囲の人間と積極的につながりを持つことができない「コミュニケーションの断絶」を起こすことになる。

ホールデンの想いは殆ど相手に届かず、それが実現することも無く、その不本意の中で、大きな身振りをしたり、嘘を連発して心のバランスを保とうとする。「僕に何か云いたいことがあったら、紙片に書いて差し出してくれるといい。ずいぶん大変なことだろうけど、僕は一生の間人としゃべらずにすむのだ」*"If anybody wanted to tell me something, they'd have to write it on a piece of paper and shove it over to me. They'd get bored as hell doing that after a while, and then I'd be through with having conversation for the rest of my life."*<sup>(18)</sup>と云うホールデンは、自らコミュニケーションの手段を押さえつけているのであり、

これは「コミュニケーションの断絶」であり、周囲に注ぐ愛は彼自身に留まり、人間的つながりの持てぬ彼は、結局、物語の最後には神経衰弱に陥り精神病院に入ることになってしまう。

## 「夢のライ麦畑」と救済

しかし、ホールデンは作品の途中何度か、さまざまものに癒され、ささやかながら幸せな気持ちも体験もする。ひどく傷つき滅入った次の日、市立博物館（セントラル・パークの西側）の方に歩いて行く途中で、貧しげだけれど仲の良さそうな家族に出会い、その中の少年が、スコットランドの詩人ロバート・バーズ（1759～1796）の歌「ライ麦畑をやってくる誰かさんを、誰かさんがつかまえたら」と美しい声で唱えながら、通り過ぎて行くのを眺めていると、つかの間癒される自分を発見したりもする。*"If a body catch a body coming through the rye." It made me feel better. It made feel not so depressed any more.*<sup>(19)</sup>

さらにホールデンは土曜日の深夜、ペンシー校の最寄りの駅、ペンシルベニア州エイジャーズタウンで汽車に乗った時、クラスメートのアーネスト・モロー（Earnest Morrow）の母親に会い、ニューアークで降りるまでの彼女と言葉を交わした短い時間は、ホールデンが初めて好感をもてる人に出会い、幾らかの屈折はあるとしても、はじめてコミュニケーションを達成し、精神的な高揚を体験した数少ない時であった。

そして、ホールデンは、なかなか精神集中ができないと悩みながらも「とても好きなひとつの事」として、二つのことを思い出す。そのうちの一つは、「僕が思いついたことは、あのひしゃげたような麦わらのバスケットに募金をして回っていた二人の尼さん」*"About all I could think of were those two nuns that went around collecting dough in those beat-up old straw hat baskets."*<sup>(20)</sup> だった。この二人の尼さんは、ホールデンが前日の土曜日に、実に様々な体験の後、疲れ果てて数時間の睡眠をとった後、日曜の朝食のレストランで出会った人たちであった。確かにホールデンは彼女たちと出会って、エレベーターボーイのモーリスから

殴打された後の、どうしようもない絶望から救出され、コミュニケーションの喜びを回復し、その高揚した気持ちの現われとして、頼まれもしないのに自ら、十ドルの寄付を申し出たのだった。この二人の尼さんとのレストランの場面も、ホールデンの最も愉快的記憶の一つであった。二つ目はというと、既述したエルクトン・ヒルズ校のジェームズ・キャッスルという生徒のことであった。

ホールデンは彼の心を癒し、心を満たしてくれるものは、彼の空想の中にしか見出せないと感じる。それは実際には親しく話すことができず、彼の空想の中でしか話せない片思いのジェーン・ギャラガーや、現実の世界では会えない死んだ弟のアーリーの思い出に耽るときである。妹フィービーに、「一体あなたはこの世の中で何がしたいのか」と詰問されると、朝、公園で出会った少年が唱っていた歌（既述）を思い出しながら、作品のタイトルにもなっている「ライ麦畑のキャッチャー」“the catcher in the rye”の願望を、ホールデンはフィービーに向かって次のように述べている。

“Anyway, I keep picturing all these little kids playing some game in this big field of rye and all. Thousands of little kids, and nobody’s around—nobody big, I mean—except me. And I’m standing on the edge of some crazy cliff. What I have to do, I have to catch everybody if they start to go over the cliff—I mean if they’re running and they don’t look where they’re going I have to come out from somewhere and catch them. That’s all I’d do all day. I’d just be the catcher in the rye and all. I know it’s crazy, but that’s the only thing I’d really like to be. I know it’s crazy.”<sup>(21)</sup>

「集まって何かのゲームをしているところを、僕はいつも思い浮かべちゃうんだ。何千人もの子どもたちがいるんだけど、ほかには誰もいない。つまりちゃんとした大人みたいなのは一人もいないんだよ。僕のほかにはね。それで僕はそのへんのクレイジーな崖っぷちに立っているわけさ。で、僕がそこで何をするかっていうとき、誰かその崖から落ちそうになる子供がい

ると、かたっぱしからつかまえるんだよ。つまりさ、よく前を見ないで崖の方に走っていく子どもなんかいたら、どっからともなく現れて、その子をさっとキャッチするんだ。そういうのを朝から晩までずっとやっている。ライ麦畑のキャッチャー、僕はただそういうものになりたいんだ。たしかにへんでんこりんだと思うけど、僕が心からなりたいと思うのはそれくらいだよ。かなりへんでこりんだとわかっているんだけどね」

ホールデンは、自分はライ麦畑の端の危険な崖から落ちる子供をつかまえる人（キャッチャー）になり、彼らを保護する人になりたいと強く願うのである。しかし、無邪気な子供（もう一人のホールデン自身）が汚れた世界に落ちるのを防いでやるということは夢物語に過ぎず、彼の弱きもの、幼き者に対する正義感空転することをフィービーから指摘もされるように、ホールデンが口にする希望は非現実的であり、またそこで演じているホールデンの役割は、大物ぶろうとする多くのフォーニーたちとは対照的に、極めてマイナーで、無名なキャッチャーと言える。

述べてきたように、ホールデン自身これまで幾度も身の周りで、イノセンスの危機を肌で感じる経験をしてきた。例えば、義父やストラドレーターに性的に迫られる、ホールデンが片思いをしているジェーン・ギャラガー、脅迫者たちに不当に前言撤回を迫られ、自殺してしまう高校のクラスメートのジェームズ・キャッスル、疾走する車のすぐ横を「ライ麦畑」を歌って歩いている少年などなど。だから「ライ麦畑のキャッチャー」の夢が、いかに美しく、また非現実的であるかということは既述の通りであるが、それが、ホールデンの心象をもっとも良く表わす原風景のひとつであった事も事実である。作者がそれを作品のタイトルにした所以でもあると思われる。

彼の思い描く「ライ麦畑」は、美しいイノセンスな楽園としての「夢のライ麦畑」のイメージとなってこの作品の中で展開されているのである。世界中の子供に歌われるようになった「夢のライ麦畑」のイノセントな世界も、美しく清らかな子

供たちの楽園であり、そこには汚れない子供たちの生命力あふれる感性が溢れており、それはまた、そんな子ども時代を通過してきたすべての大人の心の故郷でもある。ホールデンは、自殺したクラスメートのジェームズ・キャッスルも、危険な車道の端を歩いていた少年も、また死んだ弟のアーリーも、今自分の将来を案じてくれている妹のフィービーも、そのライ麦畑の楽園に住まわせたいと願う。そして自分はその楽園を見守り、保護していきたいと思う。この楽園の夢は、夢である限りにおいてのみ美しい。しかし悲しいかな、夢はいかなる夢も儂く、夢は覚めて、厳しい現実にとって代えられることは明白である。ホールデン自身も、この「夢のライ麦畑」が崩壊しつつあることに気づいている。それで、「クレイジーだと分かっている」を繰り返すわけである。結局、「夢のライ麦畑」は現実世界には存在するはずもなく、従って、ホールデンが「ライ麦畑のキャッチャー」になるはずもなく、実際は作品の冒頭の部分ですでにホールデンは傷ついており、そこからいかにその崩壊に耐えるかということが、作品のそのものの展開であった。

それがようやく作品の終わり近くになって、ホールデンはフィービーと再会して、落ち込んでいた気分が落ち着き、癒されていく自分に気付く。

I went around the room, very quite and all, looking at stuff for a while, I felt swell, for a change. I didn't even feel like I was getting pneumonia or anything any more. I just felt good, for a change.<sup>(22)</sup>

僕はとてもこっそり、その部屋を歩き回った——しばらく、フィービーの持ち物など見物しながら。気分が変わって、とてもいい気持ちだった。もう僕は肺炎やなんかになりそうな感じさえしなかった。僕は気分が変わって、すっかりいい気持ちだった。

この短い短文の中に、「気分が変わって」(for a change) という句が二度繰り返されている。誰もいない不気味な深夜のセントラル・パークで、肺炎にかかって死ぬという妄想に取り付かれて

いた状態から、今はすっかり「気分が変わって」、文字通りアット・ホームな気持ちになっている。それは何よりも最も信頼し愛する妹が今手の届くところにおり、あどけない顔をして眠っている——その確かさが彼の不安を解消してくれていると思われる。

さらに、作品の終結部でホールデンは最愛の理解者である妹フィービーを相手に、会話を交わし長いこと願っていた心温まる体験をする。再会したフィービーは、東部に嫌気がさし、西部に行ってしまうたいと嘆いていたホールデンに前言の撤回を迫る。“Did you mean it what you said? You really aren't going away anywhere? Are you really going home afterwards?”<sup>(23)</sup>（「ねえ、さっき言ったことは本当？どこにも行ったりしなくてこと。このあと本当におうちに帰る？」）と。このようなフィービーの子供らしい素朴な願いや疑問と、それに対する素直な答えなどの、彼女の天真爛漫とも、天衣無縫ともいふべきものこそ、イノセンスの美德として、ホールデンがそして作者サリンジャーが何よりも貴重なものとして評価しているものであった。

そして、ホールデンが家に帰ると約束したため安心して、回転木馬に乗っているフィービーを見ながら、ホールデンはしみじみ幸せをかみ締める。

I felt so damn happy all of a sudden, the way old Phoebe kept going around and around. I was damn near bawling, I felt so damn happy, if you want to know the truth.<sup>(24)</sup>

フィービーがぐるぐる回り続けているのを見ているとき、なんだかやみくもに幸福な気持ちになってきたんだよ。あやうく大声をあげて泣き出してしまうところだった。僕はもう掛け値なしにハッピーな気分だったんだよ。嘘いつわりなくね。

以上のように、万事窮したホールデンは、この妹の至純の愛によって初めて安らぎを得、再生が暗示され、彼は死の恐怖から救済される。ホールデンの傷ついた心は、フィービーのナイーブさの美德によって、「救済」されていくのである。

## おわりに

イノセントで「孤独」に悩み自分の心をもてあます、ホールデンの周りの社会や友人は、受け止めきれない無数の虚偽に満ちており、彼は精一杯それらに反抗するたびに跳ね返されて傷つき彷徨する。最終的に、醜悪な現実には耐え切れず、「夢の樂園」にも似た「ライ麦畑」という彼の頭の中にだけ存在する非現実の世界に逃避し、自分の夢は「ライ麦畑のキャッチャー」なることであると、最愛の妹フィービーに告白する「夢の樂園」は、ホールデンが、そして作者サリンジャーが最も価値を認めるイノセントな世界を象徴していると言える。

ホールデンが、「ライ麦畑」を「美しいイノセントの樂園」と見なすように、「ライ麦畑のキャッチャー」の物語は16歳の少年ホールデンを通して、子供の純粹無垢な世界を描き、成熟という崖から子供が転げ落ちるのを防ぎたいという作者サリンジャーの願いが込められている。ホールデンは大人の世界の欺瞞性に対してシニカルな反発を見せるが、彼の発言には弱々しさがあり、自ら転落の瀬戸際に立っているために、自分のアイデンティティと、他人との心のコミュニケーションを求め続けるが、行く先々でそれがいかに至難なことかを思い知らされ「コミュニケーションの断絶」に苦しむことになる。

ホールデンの行動は仮面が身についた大人の常識からすれば、確かに正気の沙汰とは思えぬ所業であり、顰蹙すべき野卑な言葉を撒き散らすよう注意人物として描かれているが、しかし、作品の基本的性格を単純化して言えば、「子供の夢」と「大人の現実」との衝突とも言える。いつの世にも、どこの世界にもある不可避の現象である。純潔を愛する子供の感覚と、社会生活を営むために案出された大人の欺瞞との対立。子供にとって、夢を阻み、これを圧殺する力が強ければ強いほど、それを粉碎しようとする反発力は激化してゆくのである。その体現者がこの作品の主人公ホールデンであり若き日のサリンジャーとも重なる。

この作品は、第二次世界大戦後、二十世紀中葉

の時代精神や風俗を最もよく表わしており、この作品に見られる絶望感・虚無感は、ロスト・ジェネレーション<sup>(25)</sup>の文学のそれに輪をかけて深刻であり、第二次世界大戦後の時代の中で、様々な欺瞞やインチキに傷つきながら、ホールデンは一人で闇夜を手探りするようにして試練の中を通過して行く。この作品は、ニューヨークのような物質主義的豊かさを体現する場所で、それがもたらす恩恵を享受すると同時に、心と心の結びつきや思いやりや優しさといった、物質主義的競争世界で忘れられがちな内面的な価値を、金銭の縛りや人間的なしがらみも無い自由な状態で追求し、それによって生じる問題点を見つめることで、少年ホールデンが現実との関わり方を、真剣に模索し、成長していく小説であると言える。

この作品が広く読まれたわけは、青少年たちには、自分をホールデンに位置において読んだであろうし、成人の読者は彼が批判する社会の一員として純粹な青少年の怒りを、過ぎ去った自分と重ね合わせ、回顧し理解できたからであろう。見てきたように、彼がこの作品で繰り返し語っているキー・ワードは「孤独」と「コミュニケーションの断絶」ということである。「孤独」はアメリカの文学の中でも最も長い系譜を持つ主題だが、「孤独」の存在する環境は時代と共に変化するものであり、サリンジャーの「孤独」は戦後大衆社会における中産階級の「孤独」である。従ってこの作品にも衣食住に不自由しないが、お互いに理解しあえぬ、「愛の欠如」を痛切に感じている多感な少年が登場し、今なお世界中の青少年の共感を得ている作品となっている。

(テキストにはこの作品を初めて出版したアメリカの Little Brown and Company の本を使用した。)

## Notes

- (1) 53年11月に地元の高校生シャーリー・ブラウニーの頼みで気楽に応じたインタヴューが地元の新聞のスクープとして報じられるという一件があつて以来、裏切られた思いのサリンジャーは、家の周りに高い塀をめぐらし、世

間から隔絶した生活を送るようになってしまふ。86年には、イアン・ハミルトンが書いた伝記に引用されたサリンジャーの手紙の著作権をめぐる裁判となったが、サリンジャーが勝訴した。

(2) サリンジャーは太平洋戦争の勃発を機に自分から志願して入隊し、訓練を受け最終的に諜報部隊に配属され特別情報部員となって、1944年イギリスに出兵する。しかしヨーロッパ戦線で最も過酷な戦闘といわれたヒュルトゲンの森の攻防戦に遭遇し、身近で次々に仲間が死んでいくさまを目の当たりにし、彼の戦争や軍隊に対する考え方が一変する。ドイツが降伏し戦争は終結するが、悲惨な戦争の体験によって神経を病んだサリンジャーは陸軍病院に入院する。

(3) 53年に二冊目の本『ナイン・ストーリーズ』を出版して作家としての実力を認められてきたサリンジャーの人気は、『ニューヨーカー』に発表していた「フラニー」と「ズーイ」が一冊の本として出版された61年にその頂点に達する。発売日には本屋に早朝から人々が押し寄せ、二週間で12万5000部、『ニューヨーク・タイムズ』のベストセラー六ヶ月一位という驚異的な売り上げを記録する。

その後もグラス家といわれる連作を『ニューヨーカー』に発表してカリスマ的な人気を誇っていたが、65年に「一九二四年ハブワース十六日」を同誌に発表したのを最後に、単行本はもちろん短編さえ発表することを止め、サリンジャーは公の場から姿を消し、隠遁生活に入ってしまう。

(4) 『ライ麦畑でつかまえて』のカバーに自分の顔写真を出したり、インタビューを受けたりと、はじめはいやいやながらもサービスをしていたサリンジャーであったが、押し寄せるマスコミに嫌気がさして、すっかり人間嫌いになってしまう。戦争中に雑誌に掲載された短編のタイトルが勝手に変更されたことなどもあって、もともと編集者、出版社への不信の念は強く、育ての親ともいべきウイット・バーネットとも、短編集を出す企画がだめになってから絶交状態となる。

(5) Salinger, J.D. *The Catcher in the Rye*, Little Brown and Company, 1991. 151.

(6) *The Catcher in the Rye*, 151.

(7) *The Catcher in the Rye*, 151.

(8) *The Catcher in the Rye*, 151.

(9) *The Catcher in the Rye*, 153.

(10) *The Catcher in the Rye*, 174.

(11) *The Catcher in the Rye*, 13.

(12) *The Catcher in the Rye*, 13.

(13) *The Catcher in the Rye*, 13-14.

(14) *The Catcher in the Rye*, 15-16.

(15) *The Catcher in the Rye*, 172.

(16) *The Catcher in the Rye*, 198.

(17) *The Catcher in the Rye*, 8.

(18) *The Catcher in the Rye*, 198.

(19) *The Catcher in the Rye*, 115.

(20) *The Catcher in the Rye*, 170.

(21) *The Catcher in the Rye*, 173.

(22) *The Catcher in the Rye*, 207.

(23) *The Catcher in the Rye*, 213.

(24) *The Catcher in the Rye*, 212.

(25) 文学史における失われた世代（英：Lost Generation）とは、1920年代から1930年代に活躍したアメリカ合衆国の小説家を指す語である。広義では、欧米諸国で20代の時に第一次世界大戦中に遭遇して、従来の価値観に懐疑的になった世代もさす。生年で見ると、1880年中期から1890年代までに生まれた世代（1883年~1899年生まれ）とされる。

## Works Cited and Consulted

Alexander, Paul. *Salinger. A Biography*, Los Angeles, Renaissance, 1999.

Crawford, Catherine, ed. *If You Want to Hear About It: Writers on J.D. Salinger, Salinger and His Work*, Thunder's Mouth, New York, 2006.

Salinger, Margaret. *Dream Catcher: A Memoir*, Washington Square Press, New York, 2000.

Salinger, J. D. *The Catcher in the Rye*, Little Brown and Company, 1991.

Salinger, J. D. *The Catcher in the Rye*, Penguin

Books, 2004.

ハミルトン、イアン 海保真夫訳『サリンジャーをつかまえて』文芸春秋（文春文庫）、1998年。

- アレクサンダー、ポール 田中啓史訳『サリンジャーを追いかけて』株式会社DHC、2003年
- サリンジャー、J. D. 荻田元司・熱美昭夫訳『倒錯の森<短編集II>』（サリンジャー選集3）荒地出版社、1968年。
- サリンジャー、J. D. 荻田元司・熱美昭夫訳『若者たち <短編集I>』（サリンジャー選集2）荒地出版社、1977年。
- サリンジャー、J. D. 繁尾久・武田勝彦・滝沢寿三訳『九つの物語 大工たちよ、屋根の梁を高く上げよ』（サリンジャー選集4）荒地出版社、1968年。
- サリンジャー、J.D. 野崎孝訳『ライ麦畑でつかまえて』白水Uブックス、2010年。
- サリンジャー、J. D. 原田敬一訳『ハプワース16、一九二四』（サリンジャー選集 別巻）荒地出版社、1977年。
- サリンジャー、J. D. 原田敬一訳『フラニー／ズーイー』（サリンジャー選集1）荒地出版社、1968年。
- サリンジャー、J.D. 村上春樹訳、『キャッチャー・イン・ザ・ライ』白水社、2006年。
- サリンジャー、マーガレット・A. 亀井良子訳『我が父サリンジャー』新潮社、2003年。
- 繁尾久／武田勝彦共『サリンジャーの文学』文建書房、1970年。
- 竹内康浩『ライ麦畑のミステリー』せりか書房、2005年。
- 田中啓史編著『サリンジャー』荒地出版社、2000年。
- 田中啓史『ミステリアス・サリンジャー』南雲堂、1996年。
- 田中啓史『「ライ麦畑のキャッチャー」の世界』開文社出版、1994年。
- 田中啓史編著『「ライ麦畑でつかまえて」の世界』ミネルヴァ書房、2006年。
- 新田玲子『サリンジャーなんかこわくない』大阪教育図書出版、2004年。
- 竹内康浩『「ライ麦畑で捕まえて」についてもう何も言いたくない』荒地出版社、1998年。